

後項動詞の種類からみた 日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴 —文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—

谷内 美智子

要 旨

本研究では統語的複合動詞の意味推測において、文脈量と日本語習熟度が与える影響について検討した。モンゴル語を母語とする中上級レベルの日本語学習者 54 名を対象に、調査対象語のみの提示、単文での提示、複文での提示、の三条件で、調査対象語の意味を四肢選択式で推測させた。その結果、(1)統語的複合動詞の意味推測では単文程度で十分であること、(2)統語的複合動詞の意味推測でも、正確な意味推測には一定以上の日本語習熟度が必要であること、(3)後項動詞の意味が単独動詞として使われる時の意味と同じか否かによって意味推測のしやすさが異なること、が明らかとなった。統語的複合動詞は、前項動詞と後項動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測することが可能であるために、文脈量や日本語習熟度には関係なく正確に意味を推測できると思われがちである。しかし、これらの結果から、当該の複合動詞の構成要素、当該語を取り巻く文脈量、学習者の日本語習熟度といった条件によって、正確に意味が推測できるかどうかが変わってくることを示唆された。

【キーワード】複合動詞、日本語習熟度、語の意味推測、文脈

1. はじめに

日本語学習者にとって複合動詞は学習困難な語の一つである。その理由として、体系的に学ぶ機会が少ないことと、複合動詞そのものの難しさの二つが挙げられる。松田(2004)によると、複合動詞の意味は、複合動詞を構成する前項動詞と後項動詞の相互作用によって成立するものの、その作用の仕方が一様ではない。また、森田(1978)は、

「外国人が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない。したがって、複合動詞に関する日本語力が不十分なまま上級段階に進んでしまい、圧倒的に多い複合動詞の波にぶつかって苦しまねばならぬ。複合動詞を形づくるそれぞれの部分、すなわち個々の単純動詞が既習語であっても、それらが合成する全体の意味が理解できるとはかぎらない。類推によってあてずっぽうに解釈しているのが現状であると言ってよからう。」(p. 73)

と述べている。複合動詞を体系的に学ぶ機会が多くないこと、そして、個々の単独動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測できるとは限らないことの

二点が、複合動詞の学習の難しさに影響を与えていると言える。

第二言語習得において、語彙の学習は文法の学習とともに重要な位置を占めている。しかし、第二言語語彙学習は学習すべき語数が膨大であることから、特に中級以降では辞書に頼るだけでなく、その語を取り巻く文脈から得られる情報を活用して意味を推測する活動が重要となってくる。ところが、文脈からの情報を活用して正確な意味を推測するためにはある程度の文脈量が必要であり、さらにはその文脈を理解するための第二言語習熟度が必要である。その一方、語の意味を推測する際、その語の構成要素の意味のみで意味推測に成功する場合もある。複合動詞の場合、「読み終わる」や「使い慣れる」のように個々の単独動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測できるものもあれば、「居合わせる」や「笑い飛ばす」のように、個々の単独動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測できないものまでである。ゆえに学習者が複合動詞の意味を推測する場合、個々の単独動詞の意味から複合動詞の意味をどの程度推測できるかによって、意味推測に必要な文脈量や第二言語習熟度が変わってくると考えられる。

本研究では複合動詞のうち、二つの動詞が統語的な操作で結合した統語的複合動詞を対象に、文脈量と第二言語習熟度の違いが意味推測にどのような影響を与えるのかを検討する。たいていの統語的複合動詞は、個々の単独動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測することが可能であるが、一部の統語的複合動詞は、個々の単独動詞の意味からだけでは意味推測が難しいものもある。ゆえに、個々の単独動詞からの意味推測が可能か否かによって、文脈量や日本語習熟度の影響が異なることが予想される。

2. 先行研究

複合動詞は学習困難な語であることから、研究対象として取り上げられる機会が多い。例えば複合動詞として成立する動詞の組み合わせ(何 2010)、複合動詞が学習困難な原因を探るもの(陳 2007; 白 2007)、「コア図式」を用いた学習支援方法の提案(松田 2004; 松田・白石 2006)など、幅広く研究が行われている。

影山(1993)、影山・由本(1997)、由本(2005)によると、複合動詞はその派生過程の違いから「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の二つに分けられる。統語的複合動詞とは二つの動詞が統語的な操作で結合したもので、前項動詞が後項動詞の項になるものを指す。例えば、「読み終わる」は「読むことが終わる」を、「使い慣れる」は「使うことに慣れる」を意味する。一方の語彙的複合動詞は意味の慣習化、語彙化が進んでおり(影山・由本 1997)、例えば「飲み歩く」は「何件もの店を回って飲む」ことを意味し、「飲む」のは酒類に限定される。

統語的複合動詞と語彙的複合動詞の弁別は、次の操作によって行うことができる(影山 1993)。この基準は、統語的複合動詞の前項動詞が後項動詞の項をなすという特徴を利用したもので、以下の基準に当てはまる場合、統語的複合動詞に分類される。

- ①前項動詞を「そうする」で言い換えられるか
 統語的複合動詞：返し続ける→そうし続ける
 語彙的複合動詞：見落とす→*そうし落とす
- ②前項動詞に「お～になる」が使えるか
 統語的複合動詞：
 乗りそこねる→お乗りになりそこねる
 語彙的複合動詞：泣き叫ぶ→*お泣きになり叫ぶ
- ③前項動詞に受身形が使えるか

統語的複合動詞：愛し続ける→愛され続ける

語彙的複合動詞：書き込む→*書かれ込む

- ④前項動詞をサ変動詞で言い換えられるか

統語的複合動詞：見続ける→見物し続ける

語彙的複合動詞：貼り付ける→*接着し付ける

- ⑤前項動詞を重複構文にできるか

統語的複合動詞：鍛え抜く→鍛えに鍛え抜く

語彙的複合動詞：待ち構える→*待ちに待ち構える

(影山 1993: 80-92)

以上が統語的複合動詞と語彙的複合動詞の弁別基準であるが、さらに影山(1993)は、統語的複合動詞を形成する後項動詞として 27 語を挙げている。

始動：墜落しかける、印刷しだす、到着し始める

継続：演説しまくる、演奏し続ける

完了：演奏し終える、到着し終る、調査し尽くす、

困惑しきる、黙秘し通す、考察し抜く

未遂：見物しそこなう、印刷し損じる、見物しそ

びれる、受諾しかねる、返事し損ねる、

投函し忘れる、印刷し残す、目測し誤る、

返事しあぐねる

過剰行為：執着し過ぎる

再試行：演奏し直す

習慣：運転しつける、運転し慣れる、演奏し飽きる

相互行為：非難し合う

可能：発生し得る

(影山 1993: 96)

日本語学習者が未知の複合動詞に出会った際、「前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジー」(松田 2000a, 2004 以下、「前+後ストラテジー」)を用いると指摘されているが、全ての複合動詞に「前+後ストラテジー」が通用するとは限らない。しかし学習者にとっては、どの複合動詞に「前+後ストラテジー」が適用可能なのかを判断するのが難しいと考えられる。その理由として二点挙げられる。第一に、その複合動詞が統語的複合動詞なのか語彙的複合動詞なのかが形態上からは区別がつかないという点がある。第二に、当該の複合動詞を構成する単独動詞の意味がその複合動詞の中でどの程度保持されているのかが、複合動詞によって異なること(姫野 1999)、そして単独動詞の意味がどの程度保持されているのかが、形態的には区別できない

という点がある。

影山(1993)が挙げている統語的複合動詞を形成する後項動詞 27 語は、単独動詞としての意味と同じものもあれば、複合動詞の後項動詞になった際に、単独動詞の時とは意味の異なるものもある。例えば「～だす」「～きる」「～直す」などは単独動詞として使われる時とは意味が異なる。さらに「～あぐねる」「～そびれる」「～まくる」のように、『日本語能力試験出題基準【改訂版】』（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2002 以下『出題基準』）には掲載されていないために、学習者には接触する機会がないと考えられるものもある¹。

谷内・小森(2009)によると、語彙的複合動詞の意味推測では、日本語習熟度が高い場合、文脈量が増えるとより正確な意味を推測できるが、日本語習熟度が低い場合は調査対象語のみの提示と単文での提示に差がないことが示されている。さらに、文脈量が同程度の場合は日本語習熟度が高いほど正確に意味を推測できるが、調査対象語のみの提示では日本語習熟度に関係なく意味推測が困難であることが明らかとなっている。谷内・小森(2009)の結果は、正確な意味推測に必要な文脈量は日本語習熟度によって異なるものの、文脈が多いほど意味推測が正確になること、そして調査対象語単独での意味推測は困難であることを示している。つまり、谷内・小森(2009)で対象にした語彙的複合動詞は、「前+後ストラテジー」だけでは当該の複合動詞の意味を正確に推測するのが難しいと言える。谷内・小森(2009)の結果を踏まえて考えると、統語的複合動詞の意味推測は、後項動詞の種類によって文脈量と日本語習熟度の影響が異なると予想される。

3. 研究課題

本研究では意味推測の際の文脈量と日本語習熟度が、統語的複合動詞の意味推測に与える影響について検討する。具体的には、以下の点を研究課題として設定する。

- (1)統語的複合動詞の意味推測の正確さは、文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか。
 - (2)後項動詞の種類ごとに検討した場合、
 - 2-1 意味推測のしやすさに違いがあるか。
 - 2-2 意味推測の正確さは、文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか。
- なお本研究における文脈とは、谷内・小森(2009)

にならい、当該語を取り巻く言語的情報（句、節、文、文章など）を指すものとする。

4. 研究方法

4.1 対象者

本研究の対象者はモンゴル国内の大学の3年と4年に在籍する中上級レベルの日本語学習者 54 名である。全員日本語を主専攻か副専攻で学習しており、母語はモンゴル語である²。SPOT(ver. D, E)の得点を表 1 に示す。本研究では平均値+0.5 標準偏差(48)以上の得点群を上位群、平均値-0.5 標準偏差(38)以上から+0.5 標準偏差(48)未満の得点群を中位群、平均値-0.5 標準偏差(38)未満の得点群を下位群として弁別した³。なお、調査対象者募集の際は、「日本語能力試験 2 級と 3 級の間で、やや 2 級よりのレベル」という目安で募集した。

表 1 SPOT 得点

	平均	最大	最小	標準偏差	N
全体	42.44	59.00	20.00	9.65	54
上位	52.53	59.00	48.00	3.55	19
中位	43.00	47.00	38.00	2.98	17
下位	31.28	37.00	20.00	4.76	18

注：60 点満点

4.2 実験計画

本研究では 3×3×2 の 3 要因配置を用いた。第 1 の要因は文脈量で、①調査対象語のみを提示する（以下、単独条件）、②調査対象語を単文の中で、共起語とともに提示する（以下、単文条件）、③調査対象語を複文の中で、意味推測を促す情報とともに提示する（以下、複文条件）、の 3 水準である。第 2 の要因は日本語習熟度で、上位、中位、下位の 3 水準である。日本語習熟度の指標には SPOT(ver. D, E)の得点を用いた。第 3 の要因は後項動詞の種類で、(1)後項動詞の意味が単独動詞の時と同じもの（以下、タイプ 1）、(2)後項動詞の意味が単独動詞の時とは異なるもの（以下、タイプ 2）、の 2 水準である。このうち第 1 の要因（文脈量）と第 3 の要因（後項動詞の種類）は被験者内要因で、第 2 の要因（日本語習熟度）は被験者間要因である。

4.3 調査対象語

本研究では統語的複合動詞 22 語を調査対象語として選定した。選定の際は影山(1993)、影山・由本

(1997)、姫野(1999)などを参照しながら、影山(1993)の弁別基準に当てはまること、そして前項動詞と後項動詞が『出題基準』の2級から4級の語で構成されていることを条件とした。ただ、分析時に改めて調査対象語の分類を確認したところ、22語中9語が影山(1993)の弁別基準に合わないことが明らかになった。そのため、影山(1993)が挙げている統語的複合動詞を形成する後項動詞を含み、かつ、影山(1993)の弁別基準に当てはまる語を分析対象とした。その結果、分析対象となったのはタイプ1が7語、タイプ2が6語の合計13語である。表2に分析対象とした13語の語彙級、単独動詞としての意味と複合動詞としての意味を示す⁴。

4.4 調査材料

本研究では意味推測条件として単独条件、単文条件、複文条件の3つを設け、単独条件は単独意味推測テストとして調査対象語のみを提示した。単文条件と複文条件は、文脈内意味推測テストとして提示した。単文条件では調査対象語を単文内で、複文条件では調査対象語を複文内で提示した。提示文作成の際は格フレーム検索(<http://reed.kuec.kyoto-u.ac.jp/cf-search/>)や、現代書き言葉均衡コーパスの少納言(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)などのコーパスを参照しながら、3級、4級の語を中心に作成した。また、調査対象語や提示文に使われている漢字には全てルビをつけた(表3参照)。

表2 本研究での分析対象語

	調査対象語	前項動詞の語彙級	単独動詞としての後項動詞の語彙級と意味		複合動詞としての後項動詞の語彙級と意味	
タイプ1	書き忘れる	4級	4級	傘を忘れる	掲載なし	～することを忘れる
	聞き飽きる	4級	2級	フォアグラを飽きるほどに食べてみたい	掲載なし	～することに飽きる
	しゃべり続ける	2級	3級	柔道を続ける	3級	～することを続ける
	出し遅れる	4級	3級	新幹線が遅れる	掲載なし	～するのが遅れる
	使い慣れる	4級	3級	布団に慣れる	掲載なし	～することに慣れる
	話し終わる	4級	3級	5時に仕事が終わる	3級	～することが終わる
	読み始める	4級	3級	会議を始める	3級	～することを始める
タイプ2	歩き過ぎる	4級	3級	7時を過ぎる	2級	～することが過ぎる・過度に～する
	数え直す	2級	3級	自転車を直す	2級	もう一度～する
	頑張り通す	3級	2級	検問所を開いて車を通す	掲載なし	最後まで～する
	助け合う	2級	3級	サイズが合う	掲載なし	互いに～する
	泣き出す	4級	4級	手紙を出す	2級	～することを始める
	登り切る	3級	3級	はさみで紙を切る	2級	最後まで～する

表3 調査材料の例(「書き忘れる」の場合)

提示文	単独	書き忘れる	
	短文	自分の名前を書き忘れた。	
	複文	テストの時に自分の名前を書き忘れていたので、テストの点数が0点になってしまった。	
選択肢	1	正答	Бичихээ мартах [書くことを忘れる]
	2	文脈から得られる情報と矛盾しない意味	Бичсэн болов уу үгүй болов уу санаа зовох [書いたかどうか気になる]
	3	調査対象語に使われている漢字から連想される意味	Мартсан байсан зүйлээ бичих [忘れていたことを書く]
	4	無関係な意味	Агууллагыг нь эргэн санах [内容を思い出す]

表4 意味推測テストの冊子の構成

テスト①	テスト②	テスト③	テスト④
調査対象語22文(単文)	調査対象語22文(複文)	ダミー21文(単文)	ダミー21文(複文)
ダミー21文(複文)	ダミー21文(単文)	調査対象語22文(複文)	調査対象語22文(単文)
調査対象語22文(複文)	調査対象語22文(単文)	ダミー21文(複文)	ダミー21文(単文)
ダミー21文(単文)	ダミー21文(複文)	調査対象語22文(単文)	調査対象語22文(複文)

本研究で用いたテスト形式は、モンゴル語で意味を提示した多肢選択式である。選択肢は正答のほか、表3に示した3つの誤答選択肢を作成した。また、本研究では調査対象者にすべての対象語を、3条件すべてで提示した。ゆえに順序効果を排除するため、文脈内意味推測テストはダミーの語彙的複合動詞21語も含めて提示順を入れ替えた冊子を4種類作成した⁵ (表4参照)。

4.5 手続き

調査は授業時間を利用して2日に分けて実施した。初日にSPOTと単独意味推測テストを行い、3日後に文脈内意味推測テストを行った。文脈内意味推測テストの冊子は4種類をランダムに配布した。両テスト実施の際は正しいと思った意味を選択肢から選ぶこと、辞書は使用できないこと、前のページには戻ることできないことを、テスト冊子の中でモンゴル語で教示し、さらに口頭でも注意を喚起した。

5. 結果

5.1 研究課題1：統語的複合動詞の意味推測の正確

さは、文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか
採点は意味推測条件ごとに行った。意味推測条件ごとの結果を表5に、タイプ別の結果を表6に示す。なお、タイプ1とタイプ2で満点が異なるため、比較のしやすさを考慮して、表5と表6は100点満点に換算した結果を示す。

表5の平均点を比較すると、単文条件での平均点が最も高いことが分かる。また、複文条件の中位群と下位群の平均点はほぼ同じであるが、それ以外は日本語習熟度が高いほど平均点も高いことが分かる。次に表6の結果から、どの条件においてもタイプ1の方がタイプ2よりも平均点が高いことが分かる。また、上位群ではタイプ1の平均点がどの条件においても90点以上である一方で、タイプ2の平均点は60点台から70点台である。中位群と下位群の場合、タイプ1の平均点は70点台から80点台であるが、タイプ2の平均点は50点台が中心である。特に、下位群のタイプ2の単独条件の平均点は39点と最も低い。

統語的複合動詞の意味推測で文脈量と日本語習熟度がどのように影響するかを検討するため、3×3の二要因の分散分析を行った。独立変数は文脈量(単独、単文、複文の3水準 被験者内要因)と日本語習熟度(上位、中位、下位の3水準 被験者間要因)で、従属変数は、統語的複合動詞全体にお

ける意味推測条件ごとの得点である。

分散分析の結果、文脈量要因の主効果 $[F(2, 102)=7.818, p<.01]$ 、日本語習熟度要因の主効果が有意であったが $[F(2,51)=13.988, p<.0001]$ 、交互作用は有意ではなかった $[F(4, 102)=.713, n.s.]$ 。文脈量要因のいずれの間に差があるのかを確認するため多重比較⁶を行ったところ、単独条件と単文条件の間、単文条件と複文条件の間の差は有意であったが、単独条件と複文条件の間の差は有意ではなかった(単文条件>単独条件、単文条件>複文条件、単独条件≒複文条件)。次に日本語習熟度要因について多重比較を行ったところ、上位群と中位群、上位群と下位群の間は有意であったが、中位群と下位群の間は有意ではなかった(上位群>中位群、上位群>下位群、中位群≒下位群)。

5.2 研究課題2：後項動詞のタイプ別の傾向

後項動詞の種類ごとに検討した場合に、意味推測の正確さは文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか、さらに後項動詞の種類によって意味推測のしやすさが異なるかどうかを検討するため、3×3×2の三要因の分散分析を行った。独立変数は文脈量(単独、単文、複文の3水準 被験者内要因)、日本語習熟度(上位、中位、下位の2水準 被験者間要因)、後項動詞の種類(タイプ1とタイプ2の二水準 被験者内要因)で、従属変数はタイプ別の意味推測条件ごとの得点である。分析の結果、文脈量要因の主効果 $[F(2,102)=7.532, p<.01]$ 、日本語習熟度要因の主効果 $[F(2,51)=14.503, p<.001]$ 、後項動詞の種類要因の主効果が有意であった $[F(1,51)=141.974, p<.001]$ 。しかし、2次の交互作用 $[F(4,102)=.623, n.s.]$ 、および1次の交互作用は有意ではなかった(文脈量×日本語習熟度 $[F(4,102)=.667, n.s.]$ 、後項動詞の種類×日本語習熟度 $[F(4,102)=1.540, n.s.]$ 、後項動詞の種類×文脈量 $[F(2,102)=.050, n.s.]$)。そのため、3水準である文脈量要因と日本語習熟度要因について多重比較を行った。

まず文脈量要因について、いずれの間に差があるのかを確認するため多重比較を行ったところ、単独条件と単文条件の間、単文条件と複文条件の間は有意であったが、単独条件と複文条件の間の差は有意ではなかった(単文条件>単独条件、単文条件>複文条件、単独条件≒複文条件)。次に日本語習熟度要因について、いずれの間に差があるかを確認するために多重比較を行った。その結果、上位群と中位群、上位群と下位群の間は有意であったが、中位群

と下位群の間は有意ではなかった（上位群>中位群、上位群>下位群、中位群≒下位群）。

6. 考察

6.1 研究課題 1：統語的複合動詞の意味推測の正確

さは、文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか

研究課題 1「統語的複合動詞の意味推測の正確さは、文脈量と日本語習熟度の影響を受けるか」について、文脈量の影響から検討する。文脈量について統語的複合動詞全体の意味推測条件ごとの得点を比較したところ、単独条件と単文条件の間、単文条件と複文条件の間の得点の差が有意であったが、単独条件と複文条件の間の得点の差は有意ではなかった。表5の結果を見ると、単文条件での得点が最も高く、複文条件での得点は単文条件よりも低い。このことから、統語的複合動詞の意味推測に必要な文脈量は単文程度であり、複文のように文脈量が多くなっても、意味推測が正確になるとは限らないと言える。

この結果を、語彙的複合動詞の意味推測を扱った谷内・小森(2009)の結果と比較してみたい。谷内・小森(2009)での文脈量の影響は日本語習熟度によって傾向が異なっている。日本語習熟度が高い場合、文脈量が増えるとより正確に意味を推測できるが、日本語習熟度が低い場合は調査対象語のみの提示と単文での提示に差がなかった。本研究での統語的複合動詞の意味推測の場合、日本語習熟度によって意

味推測に必要な文脈量が異なるわけではなく、どの日本語習熟度においても、単文条件での得点が最も高かった。このことから、谷内・小森(2009)で扱った語彙的複合動詞の意味推測での文脈量の影響と、本研究での統語的複合動詞の意味推測での文脈量の影響は、次の二点が異なると言える。第一点は、語彙的複合動詞の場合は、文脈量が多いほど意味推測が正確になるが、統語的複合動詞の場合は、単文程度の文脈量で十分であるという点である。第二点は、語彙的複合動詞の場合、日本語習熟度によって正確な意味推測に必要な文脈量は異なるが、統語的複合動詞の場合、意味推測が正確になる文脈量は、日本語習熟度による違いはないという点である。

次に日本語習熟度の影響について検討する。日本語習熟度については上位群と中位群、上位群と下位群の間で意味推測の得点の差は有意であったが、中位群と下位群の間は得点の差が有意ではなかった。つまり、中位群程度の日本語習熟度があれば、統語的複合動詞の意味をより正確に推測できることを意味する。この結果を文脈量の影響の場合と同様、谷内・小森(2009)の結果と比較してみたい。

谷内・小森(2009)での語彙的複合動詞の意味推測の場合、文脈が利用できる条件では日本語習熟度が高いほど正確に意味を推測できるが、文脈が利用できない条件では、日本語習熟度の高低にかかわらず正確な意味推測が困難であった。本研究の統語的複

表5 意味推測条件ごとの結果

条件	全体(n=54)		上位(n=19)		中位(n=17)		下位(n=18)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
単独	69.23	13.53	80.16	9.00	66.51	11.52	60.26	11.58
単文	75.78	15.63	86.23	7.94	72.40	16.78	67.95	15.21
複文	72.65	14.92	81.78	8.59	67.87	17.67	67.52	13.34

表6 後項動詞のタイプごとの結果

条件	タイプ	全体(n=54)		上位(n=19)		中位(n=17)		下位(n=18)	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
単独	タイプ1	82.80	15.55	91.73	9.89	78.15	17.58	77.78	14.88
	タイプ2	53.40	21.32	66.67	14.70	52.94	16.91	39.81	22.97
単文	タイプ1	88.89	16.34	96.24	6.46	86.55	19.87	83.33	17.84
	タイプ2	60.49	22.73	74.56	17.00	55.88	24.25	50.00	19.80
複文	タイプ1	85.98	16.53	93.98	7.25	81.51	22.45	81.75	14.54
	タイプ2	57.72	20.66	69.30	17.80	51.96	19.44	50.93	20.19

合動詞の意味推測の場合、単独条件での平均点を見てみると、日本語習熟度が高いほど得点も高くなっている。つまり、統語的複合動詞の意味推測では、意味推測に文脈が利用できない場合であっても、日本語習熟度が高いと意味を正確に推測できると言える。このことから、谷内・小森(2009)で扱った語彙的複合動詞の意味推測での日本語習熟度の影響は、文脈が利用できる条件であられるが、本研究での統語的複合動詞の意味推測では、文脈が利用可能かどうかにかかわらず、日本語習熟度の影響があらわれると言える。すなわち、同じ日本語習熟度の影響とは言っても、複合動詞の種類によって、影響のあらわれ方が異なると言える。

6.2 研究課題2：後項動詞のタイプ別の傾向

研究課題2の後項動詞のタイプ別の傾向について検討する。まず意味推測のしやすさに違いがあるかを検討し、次にタイプごとの文脈量と日本語習熟度の影響について検討する。

6.2.1 意味推測のしやすさの違い

統語的複合動詞の意味推測で、後項動詞の種類によって意味推測のしやすさが異なるかを、三要因の分散分析の結果から検討する。分析の結果、2次の交互作用および1次の交互作用は有意ではなく、後項動詞の種類要因の主効果が有意であった。表6の得点をタイプ別に比較してみると、タイプ1よりもタイプ2の方が得点が低いことが分かる。このことから、文脈量や日本語習熟度にかかわらず、タイプ2の後項動詞を含む統語的複合動詞の意味推測は、タイプ1の場合よりも難しいということが分かる。

タイプ1の後項動詞とタイプ2の後項動詞は、単独動詞としては初級段階で学習するものがほとんどで、学習者には非常になじみのある語だと考えられる。しかし、複合動詞の後項動詞として使われる場合、タイプ1の後項動詞は単独動詞の時と意味が同じであるが、タイプ2の後項動詞は単独動詞の時とは意味が異なる。タイプ2の後項動詞の意味は、単独動詞としての意味から派生したものであるため、単独動詞として最初に学習する意味から、タイプ2の後項動詞としての意味を推測することは難しい。森山(2012)によると、例えば「直す」の場合、中心

義は「元のよい状態に戻す」で、「電車の中で化粧を直す」や「鏡の前で髪の毛の乱れを直した」といった用例が該当する。「直す」の後項動詞としての意味は「もう一度～する」であるが、後項動詞としての「直す」の意味は、中心義の「元のよい状態に戻す」から「元の状態に戻すように、癖・欠点などがあるべきよい状態に改善する」へと派生し、後項動詞としての「直す」の意味である「もう一度～する」が出てきたものである。同様に「出す」の場合、中心義は「内から外に移動させる」で、「箱から本を出す」や「ポケットからお金を出した」といった用例が該当する。「出す」の後項動詞としての意味は「～することを始める」であるが、この意味は中心義の「内から外に移動させる」から「突然物を外に出すように、突然動作を始める」へと派生し、後項動詞としての「出す」の意味である「～することを始める」が出てきている。語の意味の学習は中心義を学習してから派生義を学習するというのが一般的であるが、第二言語学習者の場合、中心義でない意味の知識は不十分な状態であることが多い(今井1993; 松田 2000b など)。単独動詞の中心義から派生した後項動詞の意味は学習者にとって難しいものであることが、タイプ1とタイプ2の意味推測のしやすさの違いとしてあらわれたと考えられる。

6.2.2 文脈量と日本語習熟度の影響

後項動詞のタイプ別にみた場合の文脈量と日本語習熟度の影響について検討する。三要因の分散分析の結果、2次の交互作用および1次の交互作用は有意ではなく、文脈量要因および日本語習熟度要因の主効果が有意であった。このことから、文脈量や日本語習熟度の影響については、後項動詞のタイプによる違いはないと言える。

まず、文脈量の影響について考える。多重比較の結果、単独条件と単文条件の間、単文条件と複文条件の間の得点の差が有意であり、単独条件と複文条件の間の得点の差は有意ではなかった。このことは、タイプ1、タイプ2のどちらにおいても単文程度の文脈量で正確な意味を推測することが可能になることを示している。

タイプ1、タイプ2ともに、単文程度の文脈量が

最も得点が高かった理由として、「前＋後ストラテジー」が何らかの形で使える場合、それほど多くの文脈量が必要とされなかった可能性があることが挙げられる。例えばタイプ1の「書き忘れる」は単独動詞の場合と意味が同じなので、文脈からの情報に頼る必要はあまりない。タイプ2の「頑張り通す」の場合、「頑張る」の意味が既知で後項動詞としての「通す」の意味が未知であれば、文脈からの情報を利用する必要があるのは「通す」のみである。谷内・小森(2009)で対象にした語彙的複合動詞は「前＋後ストラテジー」が全く通用しないものであったため、正確な意味推測にはより多くの文脈量が必要であった。本研究で対象にした統語的複合動詞は、「前＋後ストラテジー」が通用しない部分を補う際に、文脈からの情報を参照すれば十分である。ゆえに、語彙的複合動詞に比べて、それほど多くの文脈量が必要ではなかったと考えられる。

次に日本語習熟度の影響について考える。多重比較の結果、上位群と中位群、上位群と下位群の間の差は有意であったが、中位群と下位群の間の差は有意ではなかった。つまり中位群程度の日本語能力があれば、タイプ1、タイプ2ともに意味をより正確に推測できるようになることを示している。

タイプ1、タイプ2ともに中位群程度の日本語能力があれば意味推測が正確になる理由として、「前＋後ストラテジー」が、複合動詞の構成要素からの意味推測ストラテジーであることが挙げられる。構成要素からの意味推測では、その構成要素が既知か未知かが意味推測の成功を左右する。一般的に第二言語習熟度が高いほど既知語数が多いことから、日本語習熟度が高いの方が「前＋後ストラテジー」で当該の複合動詞の意味を正確に推測できるだろう。本研究で対象にしたタイプ1、タイプ2の複合動詞は何らかの形で「前＋後ストラテジー」が使えたため、日本語習熟度が高いの方が、正確に意味を推測できたと考えられる。ただし、漢字語彙の意味推測を扱った Mori & Nagy(1999)では、構成要素からの意味推測と日本語習熟度の間には関連がないことが示されている。本研究の結果は先行研究の結果とは異なることから、この違いについての更なる研究が必要である。

以上の結果から、タイプ別に見た場合の文脈量と日本語習熟度の影響について、次のことが言えるだろう。文脈量についてはタイプにかかわらず、単文程度の文脈量で意味を正確に推測することが可能になると言える。日本語習熟度についても、タイプにかかわらず中位群程度の日本語習熟度があれば、意味を正確に推測できることが可能になると言える。ただし、タイプ1とタイプ2を比較すると、タイプ2の方が意味推測が難しい。そのため、タイプ2でより正確に意味を推測するためには、与える文脈を工夫したりすることが必要になるだろう。

7. まとめと今後の課題

本研究では、意味推測の際の文脈量と第二言語習熟度の違いが、統語的複合動詞の意味推測に与える影響について、後項動詞の意味と単独動詞として使われる時の意味との関係から検討した。まず文脈量については、タイプにかかわらず単文程度の文脈量で正確な意味推測が可能であった。これは、タイプ1はもちろん、タイプ2でも「前＋後ストラテジー」が一部は利用可能であるためだと考えられる。

また、本研究では後項動詞のタイプによって意味推測のしやすさが異なっていた。タイプ2の後項動詞は中心義から派生した意味であるが、派生義は学習者にとっては難しいものである。ゆえに、派生義が既知であれば「前＋後ストラテジー」がタイプ1のように使えたと予想される。ただ、本研究の場合は派生義が既知ではなかったと考えられるため、「前＋後ストラテジー」が通用しない部分は文脈からの情報で補う必要があったと推測される。

本研究では、「前＋後ストラテジー」がどの程度通用するかによって、意味推測に必要な文脈量や意味推測の正確さが異なることが明らかになった。先行研究では構成要素からの意味推測のしやすさと文脈量との関係については扱われてこなかった。この点について明らかにできたことは、本研究の意義の一つであると考えられる。

さらに日本語習熟度の影響については、中位群程度の日本語習熟度があれば、文脈が利用可能かどうかにかかわらず、意味を正確に推測できるように

なることが明らかとなった。また、意味推測の対象となる語の構成要素から、どの程度その語の意味を推測できるかによって、意味推測に対する日本語習熟度の影響が異なることも明らかとなった。これらのことを明らかにした点にも、本研究の意義はあると考える。

今後の課題は次の二点である。第一点は本研究で用いた調査方法についてである。テスト形式については、採点の簡便さを優先して多肢選択式を採用した。しかし、多肢選択式は調査対象者の意味推測の過程を一定の範囲内に制限してしまうため、実際にどのように推測したのかを判断するのは難しい。また、本研究では調査対象者が単独条件、単文条件、複文条件のすべてで、同じ選択肢を用いて意味推測を行った。この実験計画の場合、単独条件では常に調査対象語の意味推測を初めて行うことになる一方で、単文条件や複文条件での意味推測は、単独条件で意味推測をしたうえでの意味推測となる。ゆえに、単文条件や複文条件での意味推測では、単独条件での意味推測を振り返ることが可能で、単独条件での意味推測に比べて有利になる可能性があると考えられる。さらに、調査で使用した提示文の一部は調査対象者にとって分かりにくいものもあった。今後の調査ではこれらの点を踏まえ、調査の方法を改善する必要がある。

第二点は統語的複合動詞のより精緻な分類を行った上での再調査の必要性である。本研究では対象にした複合動詞の前項動詞や後項動詞が2級から4級までに限定されているため、1級語彙や『出題基準』に掲載されていない動詞を含む複合動詞も調査対象にした場合、文脈量と日本語習熟度の影響のあらわれ方が異なるとも考えられる。また、本研究では「問題点を洗い直す」のように、前項動詞が派生義の複合動詞は調査対象にはしなかった。今後は対象とする複合動詞の範囲を広げ、調査をする必要があるだろう。今後はこれらの点を踏まえ、複合動詞の意味推測の研究を進めていきたい。

注

1. 日本語能力試験の語彙級は、学習者にとってある語が本当に既知か未知かを保障するものではない。しかし、

本研究の対象者は外国語環境で日本語を学習しており、日本語の主たるインプットは教科書であること、また、教科書作成にも『出題基準』が広く参考にされていることから、日本語能力試験の語彙級が、学習者にとって既知か未知かを推定する目安になると考えられる。

2. 本研究では学習者の母語の知識のうち、特に漢字知識の影響を排除するため、非漢字圏学習者のモンゴル語を母語とする学習者を調査対象にした。
3. 上位群、中位群、下位群の得点の差を1要因の分散分析によって確認したところ、有意であることが示された $[F(2, 51)=141.334, p<.001]$ 。そこで、上位群、中位群、下位群のいずれの間に差があるのかを多重比較によって確認したところ、上位群と中位群、中位群と下位群、上位群と下位群のいずれの間も有意であった。
4. 表2に「単独動詞としての意味」として載せた用例は、3級、4級の語は『みんなの日本語初級I本冊』（田中他 1998）、『みんなの日本語初級II本冊』（田中他 1998）を参考にした。2級以上の語については、『明鏡国語辞典第二版』（北原 2010）にあげられている用例を参考にした。
5. 文脈内意味推測テストの冊子によって得点に差があるかどうかを確認するため、単文条件と複文条件のそれぞれで1要因の分散分析を行った。その結果、単文条件 $[F(3, 50)=.533, n.s]$ 、複文条件 $[F(3, 50)=1.516, n.s]$ ともにテスト冊子による得点の差は有意ではなかった。この結果から、調査材料の提示順序による影響はないと判断した。
6. 本研究では多重比較にフィッシャーのLSD検定を用いた。また、多重比較の有意水準は5%に設定した。

謝辞

調査にご協力くださった学生のみなさまとご担当の先生方、調査材料の翻訳を引き受けてくださったウラムバヤル・ツェツェグドラム氏、本研究に対して多くの助言をくださったお茶の水女子大学の故・佐々貴義式先生、明治大学の小森和子氏、査読者の方々に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 今井つみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点一言葉の意味表象の見地から」『教育心理学研究』41, 1-11.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』笠間書院
- 北原保雄 (2010) 『明鏡国語辞典第二版』大修館書店
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
- 田中よね・牧野昭子・重川明美・御子神慶子・古賀千世子・石井千尋 (1998) 『みんなの日本語初級I—本冊—』スリーエーネットワーク

- 田中よね・牧野昭子・重川明美・御子神慶子・古賀千世子・沢田幸子・新矢麻紀子 (1998) 『みんなの日本語初級Ⅱ—本冊—』スリーエーネットワーク
- 陳曦 (2007) 「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況の比較—コーパスによるアプローチ—」『日本語科学』22, 79-99.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 白以然 (2007) 「韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育』17, 79-91.
- 松田文子 (2000a) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65.
- 松田文子 (2000b) 「日本語学習者による語彙習得—差異化・一般化・典型化の観点から—」『世界の日本語教育』10, 73-89.
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房
- 松田文子・白石知代 (2006) 「コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究—「とり～」を事例として—」『世界の日本語教育』16, 35-51.
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14, 早稲田大学語学教育研究所, 69-86.
- 森山新 (編著) (2012) 『日本語多義語学習辞典—動詞編—』アルク
- 谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142, 113-122.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』ひつじ書房
- Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

やち みちこ／国際交流基金 日本語試験センター
Michiko_Yachi@jpf.go.jp

How does the quantity of context and Japanese language proficiency affect the inferring the meaning of grammatical compound verbs?

YACHI Michiko

Abstract

This study investigates how the quantity of context and Japanese language proficiency affects the inferring of grammatical compound verbs. Participants were 54 Mongolian native speakers learning Japanese, whose Japanese proficiency is at intermediate/advanced level. They were asked to infer the meaning of the target words under three conditions: word in isolation, word within a simple sentence, and word within a complex sentence, selecting from four multiple choices. The results show that (1) inferring the word meanings in a simple sentence leads to more accurate inference, (2) Japanese language proficiency affects the accuracy of inferring word meanings, and (3) the accuracy of inferring grammatical compound verbs is affected by the difference between the meaning of the second verb used as a single verb and the meaning of the second verb used as a compound verb. It is thought that inferring the meaning of the grammatical compound verb is not a difficult task because the meaning of the grammatical compound verb can be derived from the components of the compound verbs. However, the findings of this study show that the accuracy of inferring grammatical compound verbs is affected by the characteristics of the components of the compound verbs, quantity of the context surrounding the target words, and the Japanese language proficiency.

【Keywords】 compound verbs, Japanese language proficiency, inferring word meanings, context

(The Japan Foundation, Center for Japanese-Language Testing)